

キリスト教教育と私 (7)

塩野和夫

7

(1)

1971(昭和46)年4月、同志社大学経済学部に入學した。この年も同志社大学では入學式が行われず、必要な手続きを事務的に淡々と済ませた。キャンパスには独特の字体で、「日米安保条約粉碎!」とか「授業料値上げ絶対反対!」、あるいは「田辺町移転阻止!」と大書した立て看板が乱立していた。手ぬぐいを首に巻き、頭にはヘルメットをかぶり、3メートル程の竹竿を肩にかけた学生が10名ほど「安保粉碎!」と叫びながら行進していた。学内に一步入ると、新入生にはカオス(混沌)の世界に思われたり。その上、学友会(新左翼)によるバリケード封鎖と当局によるロックアウト

1) 1969(昭和44)年秋のある日曜日に、同志社大学工学部1年生の池田義晴さんが「大学は封鎖されていて中には入れないけど、見に行かないか!?!」と誘って下さった。高校2年生だった。初めて同志社大学へ行ったが、封鎖されている学内には入れず、京都御苑に沿って今出川通を歩いていた。その時である。タオルで顔を覆いヘルメットをかぶった20名ほどの学生が、キャンパスから走って出てきた。彼らは手に手に持った机や椅子などで、あったい間に路面電車の同志社前停車場がある辺りの今出川通にバリケードを築いて、通行を止めた。その頃今出川烏丸交差点の北東側、すなわち同志社大学今出川キャンパスの角に交番所があった。学生は火炎瓶や石を、その交番所目掛けて投げ続けた。しばらくすると、今出川通の東側から道の両端をゆっくりと進む金網でおおった頑丈な2台の車両が現れ、車の間にはかなりの高さがある網を張って火炎瓶などに備え、その後ろを重装備で固めた機動隊が歩いてきた。機動隊を見ると、学生は蜘蛛の子を散らすように一目散に学内へ逃げて行った。機動隊はたちまちにバリケードを撤去した。初めて同志社大学に行った日に、このような事件の一部始終を目の前で見るようになった。強烈な印象は同志社大学のイメージと重なった。だから、キャンパスの様子はだいたい入学前から想像できていた。それである種の警戒感を持って大学には入学していた。

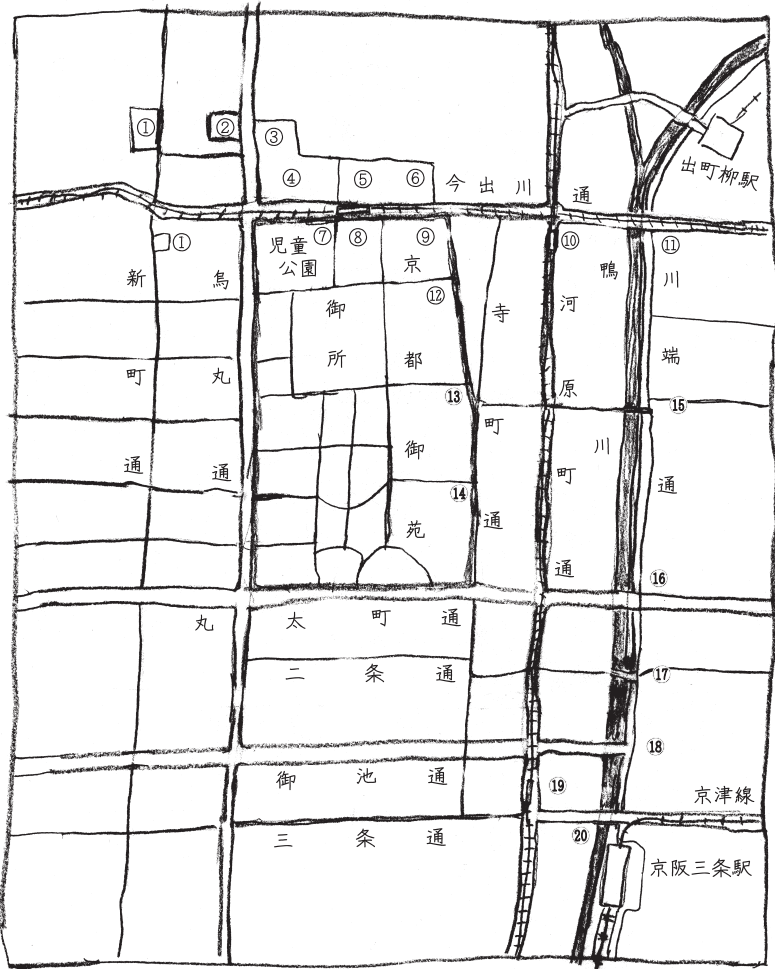
トが繰り返され、1年生と2年生の時は定期試験を受けた記憶もない。その代わりに、レポートを書留で送るように求められた²⁾。

同志社大学で経済学部を選んだ理由の一つに、高校三年生の時に経済学を教えて下さった鍋木先生の影響がある。同様に柴田さんの奨めも第2の理由である。経済学部への進学を決めた高校3年生の秋に、その報告もあって柴田さんを訪ねた。「そうか、経済学部に入るのか!」と言うと、柴田さんは膝を乗り出して「経済学を学ぶのなら、中国経済を選ぶように!」と話し始められた。「実は俺の長男の坦が台北大学で5年間勉強していて、間もなく帰国する。これから東京で会社を興して、日中貿易の仕事を始めることになっている。これからは日中関係が面白い!」と言って、中国経済を学ぶようにと強く勧めて下さった。それで中国経済を勉強することにした。その日いただいた柴田坦さんの報告書には、ピーナッツを箸でつまみながら台北で研究しておられる様子が記されてあった。

入学当初の通学は、同志社大学にたどり着くのが精一杯だった。京阪電車で枚方市駅から京阪三条駅までは急行を利用して約40分で到着した。そこから同志社大学へは2通りの行き方があった。1つはバスの利用である。京阪三条駅の東側一面はバスターミナルになっていた。そこで「59番宇多野行」のバスに乗ると、15分ほどで同志社前に着いた。バス料金は30円したが、うまく乗車できればこれが最短の便である。ところが、すぐに「59番宇多野行」に乗れることは稀だった。バス乗り場にはたいてい大勢の人がいたし、少し待っているとたちまち人で溢れた。だから、満員のバスに乗るまでには時間がかかった。バス乗り場に人が多くいるのを見ると、路面電車の河原町三条停車場まで歩いた。急ぎ足で5分はかかった。これが第2の行き方である。路面電車は比較的頻繁に来た。ただし、路面電車が河原町今出川の交差点を左折して、同志社前へ行くことは少なかった。河原町今出川からまっすぐ北へ向かったり、右折する場合が多かった。このような場合、河原町今出川停車場で下車して、10分ほどかけて大学まで歩いた。路面電車は25円だった。いずれにしても、京阪三条駅から同志社大学までは40分くらいかかった。自宅から大学までは片道約1時間40分の通学時間である。京都の街を楽しむ余裕はなかった。

2) 同志社大学の学園紛争については、下記を参照。

河野仁昭「第五部 第三章 紛争下の同志社大学」(『同志社百年史 通史編二』1470-1507頁)



- | | | | |
|----------------|------------|--------|-----------|
| ①同志社大学新町キャンパス | ⑥同志社女子中学高校 | ⑩加茂大橋 | ⑬丸太町橋 |
| ②同志社大学学生会館 | ⑦今出川御門 | ⑫石薬師御門 | ⑭二条大橋 |
| ③同志社中学校 | ⑧同志社前停車場 | ⑬清和院御門 | ⑯御池大橋 |
| ④同志社大学今出川キャンパス | ⑨今出川広場 | ⑭寺町御門 | ⑰河原町三条停車場 |
| ⑤同志社女子大学 | ⑩河原町今出川停車場 | ⑮荒神橋 | ⑱三条大橋 |

路面電車の線路は通学路だけ書いている

京都市内の通学路 (1971年当時)

1971年度の1部経済学部入学者数は約900名だった³⁾。大教室で開講される経済学部の講義でちらほらと女子学生を見かけたことはあるが、ほとんど男子学生だった。同じ学年で女子学生は50名もいなかったと思う。1年生の基礎演習も2年生後期以降の演習も全員が男子だった。そのため、経済学部には男子校だった同志社香里中学・高等学校（現在は共学になっている）の様な雰囲気があった。経済学部の専門教育科目は今出川キャンパスの大教室で開講されることが多かった。一般教育科目は新町キャンパスの大教室で行われた。演習科目は、基礎ゼミが新町キャンパスだったのを除いて、今出川キャンパスの小教室で開かれた。語学（英語と中国語）は今出川キャンパスの場合もあれば新町キャンパスで開講される時もあった。ただし、いずれも小教室だった。体育の実技はハンドボールになるが、京都御苑の今出川広場にあるグラウンドで行われた。グラウンドには更衣室がないので、学生は周辺で体操服に着替えていた。食堂は今出川キャンパスにある明德館の地階と学生会館の1階にあった。いずれも大学生協の運営であるが、間取りや明るさによって雰囲気はずいぶん違っていた。

*

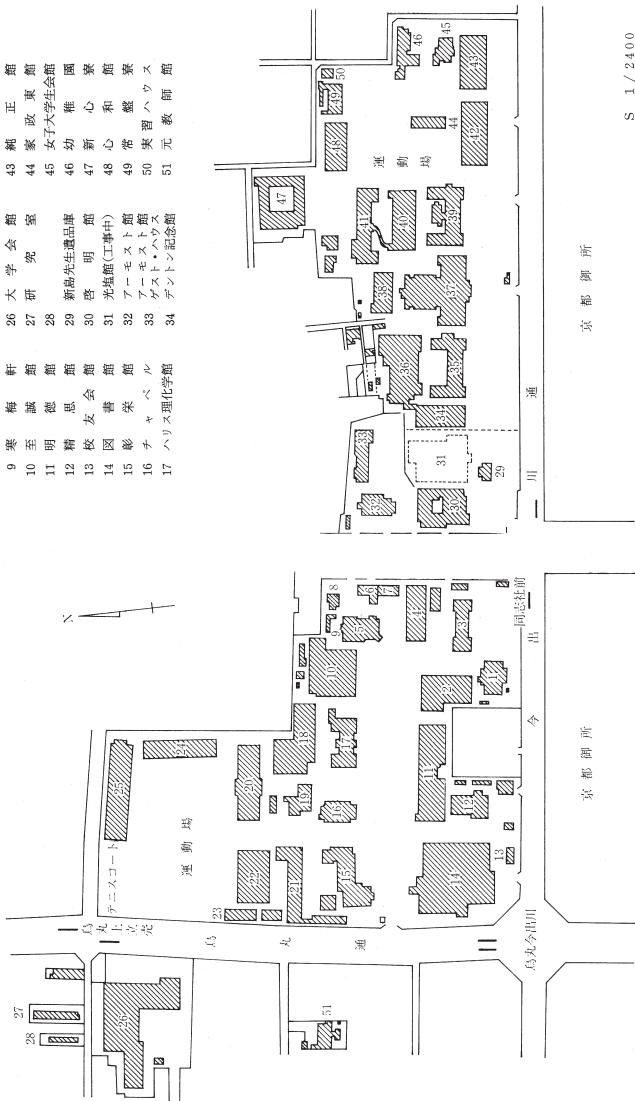
経済学を学ぶにあたって、高校3年生の時から社会科学の本を少しずつ読み始めていた⁴⁾。一連の読書は社会に対する知的関心を目覚めさせ、大学で経済学を学ぶ備えとなった。このように一方で社会に対する理性的な興味を高めながら、実践的には個々

3) 1971年4月の入学者は1971年度生と呼ばれ、1975年3月に卒業した。『同志社百年史 資料編二』（1787頁）によると、1975年度の1部経済学部入学者数は905名、卒業生は772名である。1971年度の入学者数も1975年度とほぼ同数であろうと推測できる。

4) 高校3年生（1970年4月から1971年3月まで）の時に読んだ社会科学系の本は次の通りである。都留重人『経済学はむずかしくない』『高橋是清』アルプール・ソプール『フランス革命（上）（下）』『法というものの考え方』喜多村造『ケインズと現代の経済学』中山伊知郎『スミス 国富論』都留重人『物価を考える』増田四郎他『経済学のすすめ』

大学1年生（1971年4月から1972年3月まで）で読んだ社会科学系の本は次の通りである。大塚久雄『社会科学の方法—ヴェーバーとマルクス—』吉野俊彦『私の戦後経済史』K.マルクス『賃労働と資本』M.L.キング, Jr.『自由への多いなる歩み』K.マルクス『賃金、価格、利潤』三宅義夫『金—現代の経済学におけるその役割』鈴木武雄『お金の話』吉川幸次郎『中国の知恵』牧野純夫『円・ドル・ポンド』第2版, E.H.カー『歴史とは何か』飯沼二郎『風土と歴史』ホワイ特『科学と宗教の闘争』

- | | | | | | |
|----|---------|----|----------|----|---------|
| 1 | 有終館 | 18 | 扶輪館 | 35 | ゼームズ館 |
| 2 | 弘風館 | 19 | 醇學館 | 36 | 美真館 |
| 3 | 致遠館 | 20 | 學立館 | 37 | 榮光館 |
| 4 | 神字館 | 21 | 立休館 | 38 | 頌頌館 |
| 5 | クアーク記念館 | 22 | 体育館 | 39 | 和望館 |
| 6 | 国文学研究寮 | 23 | 講武館 | 40 | 希聖館 |
| 7 | 宏教センター | 24 | 博士会館 | 41 | 黎明館 |
| 8 | 旧厚生館 | 25 | 大研室 | 42 | 新純館 |
| 9 | 葉梅館 | 26 | 学究室 | 43 | 家政館 |
| 10 | 至誠館 | 27 | 研究室 | 44 | 女子大学生会館 |
| 11 | 明徳館 | 28 | 新島先生遺品庫 | 45 | 稚心館 |
| 12 | 精女会館 | 29 | 啓明館 | 46 | 新和館 |
| 13 | 図書館 | 30 | 光輝館(工事中) | 47 | 常盤館 |
| 14 | 図書館 | 31 | アームレスト館 | 48 | 常盤館 |
| 15 | 彰栄ビル | 32 | アームレスト館 | 49 | 常盤館 |
| 16 | チャペル | 33 | ダグスト・ハウス | 50 | 常盤館 |
| 17 | ハリス理化学館 | 34 | デントン記念館 | 51 | 元教師館 |

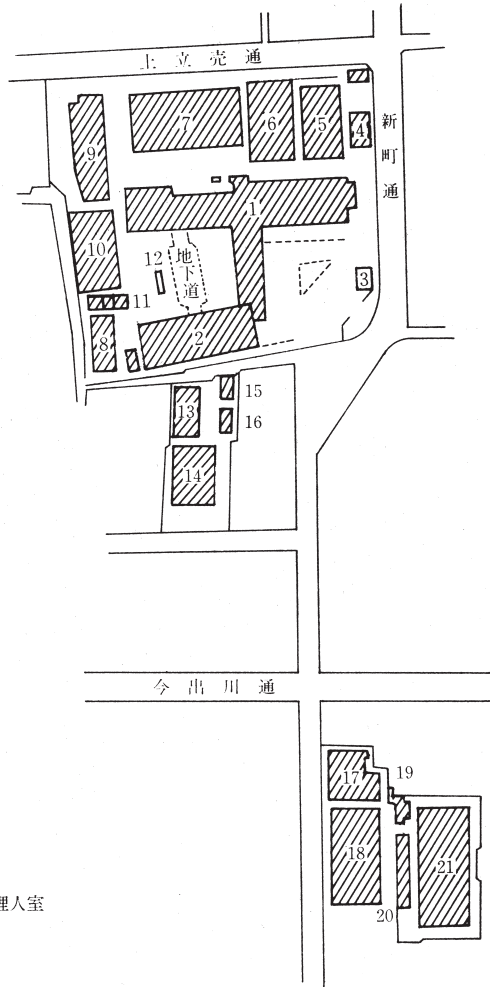


S 1 / 2400
1976. 3.31 現在
『同志社百年史 資料編二』(1730-1731頁)より
同志社今出川キャンパス (1975年当時)

人への関わりを深めていった。同志社香里高校を卒業するにあたって3年E組の寄せ書きに書いた「一隅を照らす」という言葉は、当時の実践的関心をよく表現している。大学に入って直ちに始めた「一隅を照らす」行動は、家庭における聖書講義である。毎週日曜日の夕方、家族に呼びかけて聖書講義を始めた。一番熱心に参加したのは父親である。マタイ福音書から始めた話をひと言も聞きもらすまいとして、父は耳を傾けていた。数年前から彼はキリスト教に関心を示していた。「通勤の途中に読むから」と言っ、息子から借りたキリスト教書を父は次々と読破していた。その中に『黒崎幸吉著作集 全7巻』がある。香里教会では中学3年生の分級を担当した。その頃、毎朝聖書を読み課題をあげて祈っていた。朝の祈りの時に、分級の生徒の名前があがらない日はなかった。

大学には月曜日から金曜日まで毎日通う。都丘町から枚方市駅までのバスと枚方市駅から京阪三条駅までの電車は定期券を買った。しかし、京阪三条駅から同志社前までは定期券を購入しないで、行きはバスか路面電車を利用した。帰りはゆったりした気分で歩いた。京都御苑に今出川御門から入り清和院御門から出て、寺町通を三条まで行くのが通常のコースだった。このコースの魅力の一つは丸太町通を渡ったところにあったラーメン屋である。家庭教師の日はたいていここに寄って、味噌ラーメンを食べた。もう一つは古本屋である。丸太町通を渡ると寺町通沿いには何軒も個性のある古本屋があり、そのどこか一軒に立ち寄った。清和院御門からまっすぐ東に行くと、荒神橋がある。橋の少し手前の北側にキリスト教書を扱う京都ヨルダン社があった。レオ・レオーニの絵本に会ったのはこの書店である。今出川通を東に行き寺町通に入ると、すぐ西にやはりキリスト教書を専門にする CLC・BOOKS 京都店があった。分級の生徒への誕生プレゼントを求めたのはこの書店である。

学生運動は盛んだったが、授業は通常通りに行われていた。経済学部では、1年生は近代経済学かマルクス経済学から経済原論を選択しなければならなかった。選んだ近代経済学経済原論の講義は明德館の大教室であった。同志社グリー出身で大柄な若手の先生は、何回も黒板一杯に書いては消して熱心に講義していた。基礎演習は中国経済を採った。担当の島一郎先生は、「如何にしてより多くの人に経済的な恩恵を及ぼすことができるかを研究する経済学には夢がある」と語っておられた。先生はロマンティストだった。テキストは毛沢東が書いた中国近代史に関する小さな本だった。一般教育科目のフランス文学を担当した先生は、「友人の高橋和己が亡くなり、悲し



- 1 尋真館
- 2 臨光館
- 3 門衛所
- 4 自動車部室
- 5 第1育真館
- 6 第2育真館
- 7 知得館
- 8 考古資料室
- 9 新町別館
- 10 溪水館
- 11 体育部室
- 12 学生部室
- 13 体育部室
- 14 第1従規館
- 15 合宿所
- 16 作業員住宅
- 17 学生部室
- 18 第2従規館
- 19 水泳部合宿所及管理入室
- 20 スタンド
- 21 プール

S1/2400 1976. 3. 31 現在

『同志社百年史 資料編』(1732頁)より

同志社大学新町キャンパス (1975年当時)

くて講義なんかできない」と言って、2か月近く休講された。自然科学総論の若い先生は、「研究室にはいつでもお菓子を用意しているので、話したい学生は遊びに来るように!」と誘って下さった。

入学当初は同志社香里高校の卒業生と話すことが多かった。少しすると、それ以外の学生とも親しくなった。中国語のクラスには阪神タイガースで活躍することになる笹本、それにバレーボール部や柔道部にスポーツ推薦で入ってきた学生がいた。教室では彼らと机を並べていた。体育実技のハンドボールで出会った一人に、和歌山県出身の男子学生がいる。彼の家は「ミカンを入れる木箱を作っているが、最近は段ボール箱におされて仕事が減っている」と話していた。鳥ゼミで一緒になる家長隆君もハンドボールをするために着替えていた時に会い、初めて話し合った。時間割に授業が空いていたり休講になると、京都御苑に行き芝生で昼寝をした。ここで出会ったのが大西寿郎君である。横になりながら、彼は英語の単語帳を繰っていた。

*

夏休みに入ると、香里教会から派遣されて清水正憲さんとAVACO（キリスト教視聴覚センター）主催の夏期講習会に熱海の暖海荘へ出かけた。全国から500名を越える参加者があり、会場は熱気でむんむんとしている。参加者の多くは20代の青年だった。2泊3日（だったと思う）の講習会プログラムは大広間で開かれた全体会と部屋に分かれる分団を中心に組んであった。全体会では中近東風の衣装に身を包んだ飯清牧師（霊南坂教会）の軽快なスピーチが印象に残った。20ほどある分団から中学生と高校生の分級を扱った石井錦一牧師（松戸教会）のグループを選ぶ。『信徒の友』誌（日本キリスト教団出版局）等に関わっておられた石井牧師は、博識で穏やかに話された。20名ほどの構成員も積極的に発言したので、分団はとても盛りあがる。その中に安中教会から参加している女子青年がいた。群馬県の安中と言えば新島襄が育った土地であり、長く安中教会の牧師をした柏木義円の思想とりわけ「愚俗の信」という彼の言葉にも強く惹かれていた。それで「安中教会を訪ねてみたいのですが?」と希望を伝えると、「牧師に伝えておくので、日程が決まったら連絡してください」という返事をもらった。夜になると、飯忍（飯清牧師の長男）を中心に、「お化けごっこをしよう」と相談がまとまった。メンバーの中に細身でどこことなくおどけたような雰囲気醸し出す青年がいた。彼の全身にトイレットペーパーをまくとミイラのできあ

がりである。少し歩いてもらうと、手の動かし方といい足の動かし方といい何とも言えないおかしさがある。早速、各部屋を回り「お化けが出たぞう！」と叫んで、ミイラを登場させた。どの部屋も「キャー！キャー！」と大はしゃぎで、たいへん盛り上がった。十分に楽しんで部屋に帰ると、飯忍さんに「安中教会の帰りに霊南坂教会に寄ってもいいですか？」と尋ねた。彼からは「日程さえ知らせてもらえれば、いつ来てもいい」という返事をもらう。

大阪に帰ると、早速安中旅行の計画を立てた。その頃、山中湖畔に同志社の宿舎（徳富蘇峰が同志社に寄付した別荘）があった。まずこの宿泊所に一泊する。次いで安中教会に二泊、最後は霊南坂教会に一泊するという計画である。ただちに、同志社の施設課に

行って山中湖畔にある宿舎での一泊を予約する。それができたので、安中教会と霊南坂教会の仲間に日程と宿泊の依頼を認めた手紙を送る。それから、8月上旬に香里教会による二泊三日の教会学校キャンプに出掛けた。小学生・中学生・高校生・教会学校の教師（多くは青年）、それとまかないを担当下さる方がたを入れると、みんなで60名に近かった。このメンバーを5つの班に分けて食事の準備などを担当した。場所は今年の夏から宮津市にある同志社中学校由良キャンプ場になった。由良川が若狭湾に注ぐ河口のすぐ西側に位置するキャンプ場である。香里園からバス1台に乗り込み、約3時間かけてキャンプ場に着いた。中学3年生の分級からは3名の参加者があった。8月下旬にもう一つのキリスト教系研修会に参加した。浜名湖湖畔のユースホステルで開催された日本キャンパス・クルセード主催の集会である。2泊3日の期間に何度か聞いた新井宏二先生（単立馬橋教会）の講演は、日本伝道の情熱に満ち満



上段：ミイラに扮した男性
中段左：清水，下段左：塩野，下段右：飯

「お化けごっこ」のメンバー

ちたもので参加者を圧倒した。打ち解けた雰囲気の中で青年同士も素直に話し合うことができた。本城勇介さん（現在、岐阜大学教員）と出会ったのはこの時である。

9月に入って念願の安中旅行に出かける。京都で東海道線の汽車に乗り、沼津駅で御殿場線に乗り換え御殿場で下車した。そこからはバスを利用して山中湖畔の宿舎に着いたのは夕方である。宿泊所は別荘を学生に提供するために改装しており、快適だった。宿舎ではゼミ旅行で利用していたグループと同じになるが、その中に同志社香里高校出身の同級生がいた。翌日は一人で山中湖畔からバスで八王子に向かった。八王子からは八高線で高崎を目指した。汽車から眺める関東大地に広がる田園風景は関西のそれとは違う雄大さがある。1970年代の駅舎も素朴な作りで、柏木義円が思想した地方を想像させていた。前橋に着くと早めの夕食を採り、隣の安中駅に向かった。安中教会はすぐに分かる。牧師館を訪ねると、出て来られたのは牧師夫人だった。早速、AVACO講習会で知り合った安中教会の教会学校教師の名前を告げ、「彼女を通じて、今日から2泊の宿泊をお願いしていた塩野です」と挨拶した。すると名前の女性は8月に入ってから教会に来ていないし、「あなたのことは聞いていない!」と言ってひどく叱られた。彼女はその後、「なぜ、あなたは直接教会に知らせなかったのか?」と聞いていたらしいが、頭が混乱して何を言われているのかよく理解できなかった。そこへ井殿園牧師が来られて、旧牧師館で休めるように準備して下さった。翌朝は旧街道を「ここが新島先生の育てられた安中か」「ここが柏木義円も愚俗の信を思想しつつ生活した安中か」と感動しつつ散歩し、また新島学園を遠くから見学した。午後になると井殿園先生が車で高崎まで案内し、その途中で「柏木のこと」「安中教会のこと」「霊南坂教会と安中教会の交流のこと」などを教えて下さった。安中教会を失礼した時には、奥様もにこやかに見送って下さった。井殿準君（現在、翠ヶ丘教会牧師）はその時小学生だった。東京に着くとしばらく時間をつぶし夕食も済ませて、霊南坂教会を訪ねる。午後7時を回っていた。玄関をノックすると飯忍さんが出てこられて、用意されていた部屋に荷物をおかせてもらった。居間には家族の皆さんがおられて歓迎して下さいました。飯清牧師は途中で帰って来られたが、すぐに仕事部屋に行かれた。翌朝は朝食を御馳走になったが、トーストとハムエッグをメインにした洋風の食事だった。いつもご飯とみそ汁の朝食を採っている者には、ハイカラな感じがして珍しかった。飯忍さんは友人に頼んで車を用意してくれていた。「行きたいところがあれば、どこへでも案内するから!」と言われた。「最近、興味があるのは喫茶店



安中教会



霊南坂教会

なので」と答えると、しばらく周辺をドライブしてから喫茶店に案内して下さった。同志社大学周辺や香里園辺りで利用していた店とは違って、ずいぶん洗練されていた。霊南坂教会を失礼した時は、飯謙君（現在、神戸女学院大学学長）が地下鉄の駅まで案内してくれた。彼は高校2年生だった。

(2)

塩野元次郎が膝に違和感を覚えたのは長男の和夫が高校2年生の時で、48歳であった。バスに乗ろうとすると痛みが走り、すぐにステップを上ることができなかった。それは元次郎にはショックだった。そこで、知人の紹介で京都にあった寺院風の治療所にしばらく通うことになる。驚いたことにわずか数回の治療で彼の膝は完全に治った。その時出会ったのが、カイロプラクチックを基本とした治療法である。癒された経験を踏まえて、元次郎のいう研究が始まる。カイロプラクチックに関しては、英語文献を取り寄せて息子たちに翻訳させた。その他に電気針治療や操体法の研究、それに加えて東洋医学の関連文献をひたすらに読みつづけた。翌年になると石川県知事（だったと思う）の許可証を取得する。その上で、毎週土曜日と日曜日にはそろばん教室の一角にテントの様な一室を設け、その中で治療活動を始めた。初めはご近所で腰痛や関節痛、ぎっくり腰などに悩む人を対象にした。治療する際に父の発する

「エイ！エイ！」という気合の音が教室に響いていた。治療をしながら、父は「法律で治りますということは禁じられているので、よくなりますよと患者さんには声をかけている」と言っていた。

口コミで利用者は増えていった。そこで、弟と私のために7畳半の小屋を庭に立て、和室の一室を治療室に一室を待合室に改造した。そして、それまでの勤めを止め本格的にカイロプラクチックの仕事を始めたのは父が50歳の時であり、私は大学1年生だった。それ以来、食事を終えると弟と私は小屋に引き上げた。夜に小屋で勉強をしていると、トントンと窓をたたく音がする。それは決まって池田さんだった。池田さんは、「今から奈良公園まで鹿を見に行くが、一緒に行かないか？」「琵琶湖の水を触りに行くが、一緒に行かないか？」等と誘って下さった。もちろん誘いを断ったことはない。車には2歳年上の松本伸一さんや安達英行さんが必ず乗っていて、ドライブをしながら議論を楽しんだ。そのような中で9月に入って呼びかけたのが、同志社大学における聖書研究会の開催である。同志社大学には香里教会関係の学生が複数いる。会場としては学生会館を利用できる。京都大学や立命館大学にも協力者はいる。相談の結果、10月から月1回水曜日の午後に聖書研究会を開くことにした。テキストとしてはヨハネ福音書を学ぶことにする。始めると工学部4年生の伊藤さんは毎回熱心に参加され、京都大学や立命館大学からも出席者があった。同志社の参加者も機会があると京大や立命館に出かけていった。こうして、聖書研究会を手がかりにして大学を越えた交流が開けていった。

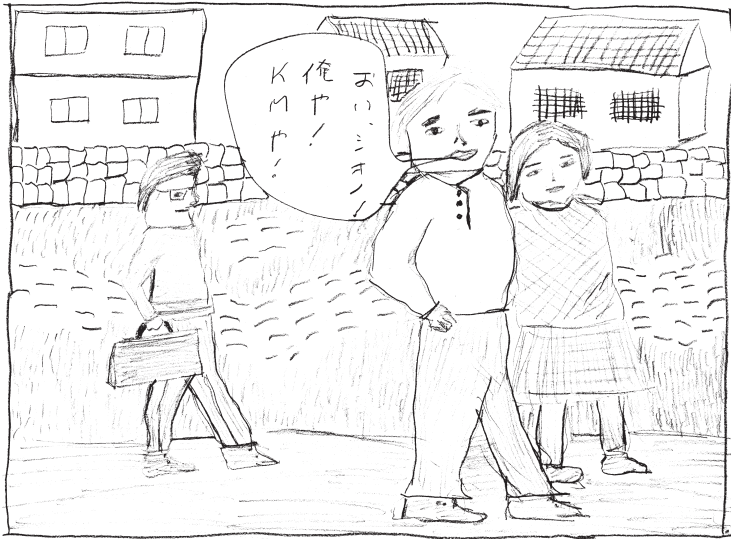
そういえば9月上旬の日曜日の朝、香里園駅で下車して車の多い通りから住宅街に入って間もない辺りで、一組の若い男女を追い越した。男性はぶくぶくと太り足元もおぼつかない様子だった。それで女性は男性の手を取って、ゆっくりと一緒に歩いていた。その時は顔を見ると失礼だと思い、すっと二人を抜いていった。それから1か月ほど経った日曜日である。この前と同じ場所を同じ二人が前の方を歩いている。急ぎ足で二人に追いつこうとした瞬間である。男性が私の方に顔を向けて言った。

KM おい、シオノ！俺や、KMや！

塩野 ええ、KMか？久しぶりやなあ。

KM シオノ！俺の家はすぐそこにある。寄って行かへんか？俺が病院に入ってから話、聞いてもらおうと思う。

塩野 分かった。寄らせてもらう。



「おい、シオノ！」と呼ばれる

KMの家は通りから少し入った所にあった。玄関に立つと、お母さんが出て来られ、居間へ案内し紅茶とケーキを出して下さった。KMは同志社香里中学校の同級生で、その頃は大阪市内から通学していたと思う。同じクラスになったことはないが、中学校ではよく見かけていた。

塩野 久しぶりやな、どうしていたんや？

KM 俺な、高校に入るとすぐ入院したんや。……精神病院や。塩野は知っていたか？

塩野 ………。KMが入院してたなんて、知らん。そういえば、高校でKMを見かけなかったな。

KM 俺、太っているやろ。薬のせいや！いろんな薬を一杯飲まされた。そうしたら、こんな体になってしもた。

塩野 ………、なんとかならんのかな？

KM 病院で一人部屋の時はひどかったで。あれは独房や！ご飯を持ってきてもらったが、あれは餌やった。

塩野 大変やったな！今はどうしてんねん？

KM 今は4人部屋や。面会をする部屋もある。

塩野 そうか。大変やけど、少しは良くなってよかったな。

KM 週に一泊二日だけ、外出もできるようになった。一か月くらい前、俺を追い越して行ったやろ。あの時も外出で帰ってた時や。

塩野 ………。そういえば、一か月くらい前に追い越したな。あれはKMやってんな。面会に行こうか？病院はどこや？

KM T市の病院や。国鉄と阪急の二つの駅がある。国鉄のT駅の少し向こうに病院はある。来る時は、寿司の差し入れを持ってきてくれ。寿司が食べたい！

あっという間の1時間であった。急いで教会に行くと、礼拝は終わりかけていた。

*

後期が始まると、自宅から枚方市駅までは往復共に歩くようになった。府道144号線を歩き、禁野口の交差点で左に曲がり天の川の天津橋を渡ると、枚方市駅南口はすぐそこだった。2キロメートル足らずの道を20分ほどで歩くと、バスの所要時間と大差なかった。それと、同志社大学から京阪三条駅までの帰路を40分ほどかけて歩いた。

そんなある日のことである。大学に入学してからも週に二回、小西家の家庭教師に出かけていた。夕方にいつものように勉強を始めると、兄弟が揃って聞いてきたのである。

兄弟 お兄ちゃんの足、匂うんやない？

塩野 そうかな。そんなに臭いかな？

兄弟 お兄ちゃん、今日、どれだけ歩いた？

塩野 家から枚方までの20分と、大学から京阪三条駅までの40分や。

兄弟 道理で臭いはずや！

それから「シオノの足は臭いぞ！」と言われるようになった。かまわず、私は歩き続けた。

10月も終わろうとしていたある日、同志社大学からの帰路に珍しく今出川通を東へ

進み、加茂大橋を渡り川縁の道を行こうとして橋の下に降りた。すると、大橋の下に30歳くらいの男の人が立っていた⁵⁾。彼はビールをラップ飲みしていて、声をかけてきた。次々と尋ねて来られたので、30分ほども話し続けた。「強がりを言っていたけれども、本当は生活大変なんだろうな」。「あんなに長く話し込んだのは、人との関わりが欲しいからなんだろうな」。「だから、あの人の心はとてもさみしいのではないかな」などと、帰り道に彼のことを様々に思い巡らしていた。それが橋の下で生活する人と話しあう最初の機会となった。その後、彼らと度々言葉を交わすことになろうとは想像もしなかった。

11月に入って、T市にある病院にKMを訪ねた。約束の寿司は枚方市駅北口で買った。北口からバスに乗り、T市の国鉄駅前で降りると、病院の場所はすぐに分かった。広い病院だった。受付で用件を伝えると、病棟における面会方法を教えてくれた。入院病棟は一般の診察が行われている建物とは庭を隔てた向こう側にあった。前に立って見ると、横に長い建物だった。その真ん中あたりに庭に突き出た玄関があって、そこで出入りする者全員がチェックを受けた。受付におけるチェックを終えて建物に入ると、奥行きのあるかなり広い面会室になっていた。面会中の人や入院患者同士で話し合っている人もいるように思われた。しばらくすると、左側の通路からKMは現れた。どうやら男性入院患者の病室は左にあり、女性の病室は右側にあるらしかった。差し入れの寿司を出すと、KMは喜んで受け取った。2人の話題はもっぱら中学校時代の仲間の近況についてであった。KMが彼らの名前を一人ひとり挙げて、「あいつは今どうしている？」と同じ質問をしてくる。知っている限りを正直に答えた。あっという間に過ぎた1時間だった。

*

12月に入ったばかりの月曜日⁶⁾、ずいぶん冷える朝だった。予想していた通り、京阪三条駅横のバスターミナルは溢れるように人がいた。「この様子だと、路面電車も

5) 参照、「おっちゃん」(『一人の人間に』20-21頁)。なお、「おっちゃん」では「京阪三条から鴨川沿いに大学へ歩いてきた時」となっている。現在の記憶では、本文にある通り大学からの帰りで場所は加茂大橋の東側である。記憶が錯綜している。

6) 参照、「福音とは」(『一人の人間に』24-25頁)。「福音とは」には、「大学1年生の冬、クリスマス前のこと」とある。現在の記憶では、11月下旬から12月に入ったばかりのことだと思う。記憶に違いがある。

人が多いだろうな」と思うと、しぜんと足は三条大橋を渡った所で川縁の道に下り急いで歩き出していた。40分あれば1限目の授業には間に合う。あつという間に御池大橋の下をくぐり、二条大橋の下に来た時である。

土手で一人の人がうずくまる様にして、小さな焚火を熾している。橋の下には寝床があり、周辺には生活道具らしいものも少しは置いてある。その人というのは、髪の毛はぼうぼうに伸び、もとの色が何色であったか分からないまでに服は古びている。「急いでいる朝に、見たくないものに出会ってしまった!」と思った瞬間、その人に注がれている誰かの視線を感じた。誰かとは、……主イエスである。「主イエスが見つめておられる!」と思うと、直前に心をかすめた思いが恥ずかしくなった。それで通り過ぎるのを止めて、おっちゃんの前に座った。前に座っている学生などいないかのように、おっちゃんは一つの缶から餅を取り出して焼き始めた。しばらくすると別の缶から塩を取り出し、ほど良く焼けた餅にふりかけて食べ始めた。食事の途中でまた別の缶から生の玉ねぎを取り出して、餅と交互に食べた。

そんな一部始終を見ていて、食事が終わるのを待って話しかけた。

塩野 京都は寒くて、大変ですね。

おっちゃん ………。

塩野 おっちゃんの故郷はどこですか？

おっちゃん 浜松や。

塩野 浜松はいいところですね。

おっちゃん けど、こんな姿では恥ずかしくて帰れん!

塩野 橋の下での生活、大変でしょう？

おっちゃん いいや、こういう生活も慣れるとけっこう楽しいものや。

塩野 さみしくはないですか？

おっちゃん さみしいなんて気持ち、忘れてしまった。

いつも持ち歩いている小さな聖書があった。話が一段落すると、この聖書を鞆から取り出してルカ福音書第15章8-10節を開いた。聖書を読み終わると、「ここには一人ひとり人間は銀貨の様に価値のある存在だと記されています」と話し始めた。本当は「おっちゃんは」と言いたかったが、そのようには話せなかった。おっちゃんは

学生の話に静かに耳を傾けていた。話し終わると聖書を差し出し、「これ、おっちゃんにあげます！」と言った。おっちゃんの返事は「字は読めんから要らん」だった。そこで、財布の中に千円札が2枚あったので、「これで温かいものでも食べて下さい」と言って、千円札を1枚渡した。

(3)

二条大橋の下で生活を始めたおっちゃんは、中肉中背の体でふくよかな顔つきをしていた。その上穏やかな物腰だったので、どことなく長老の様な雰囲気漂わせている。焚火を囲んで話し合ってから「何かできることはないだろうか？」と考え、とりあえず2つのことを始めた。自宅から枚方市駅まで歩くと、市駅南口の少し手前に古びた家で営んでいるパン屋さんがあった。覗いてみると、70円ほどで大きめのパン1個を買えた。70円といえば、路面電車の往復運賃に少し加えた金額である。早速、翌日の火曜日からはパンを買い届け始めた。これが一つのことである。もう一つは教会との相談である。二条大橋を過ぎて丸太町大橋で道路に上がり、京都御苑に沿って北へ少し行くと寺町通りに面してR教会がある。「おっちゃんのことについて相談してみよう。とりあえず、どこかでおっちゃんを風呂に入れてもらおう相談をしてみよう」と考え、火曜日の朝はR教会の牧師館を訪ねてみた。

牧師館の戸を軽くたたき、声をかけてみた。残念なことに人の気配はなかった。それで翌日の水曜日には用件と塩野への連絡先を書いた手紙を用意して牧師館のポストに投函した。木曜日の朝も寄ってみたが、やはり誰とも会うことはできなかった。仕方がないので、連絡を待つことにした。しかし、ついに何の返事も来なかった。この時点で教会との相談は断念した。

パンはおっちゃんが寝ている時は枕元にそっと置いた。留守の時にもやはり枕元に置いておいた。ところが、パンを届け始めるとたちまちに内面的な葛藤を苦しむことになる。内なる声が呟いて来たからである。

内なる声 お前はパンを届けるという行為によって、高慢になっているのではないか？

塩野 そうかもしれない。しかし、食べることに困っている人に一度始めた行為を止めるわけにはいかない。

内なる声 そうすると、あの行為によって人を見下げ続けるというのか？

塩野 ………!?

パンを届け始めた翌週の月曜日は、心が苦しくていつものパン屋さんの前を通り過ぎようとした。すると、その時目に入った光景がある。店と道路を隔てた反対側に大きなゴミ箱があった。その日の朝、このゴミ箱をあさっているおっちゃんがいたのである。おっちゃんを見るとすぐに店に入り、いつものようにパンを買った。そしてこの朝は、ゴミ箱をあさっているおっちゃんにパンを差し出した。

塩野 おっちゃん、これ。

おっちゃん ありがとう！

その時、始めて分かった真実がある。それは言葉を介して心を通い合わせる大切さである。二条大橋の下で生活しているおっちゃんには「寝ているところを邪魔してはいけない」という思いが先に立ち、言葉をかけていなかった。しかし、そのためにパンのやり取りに伴うべき心の交わりが欠如していた。ここに問題があった。

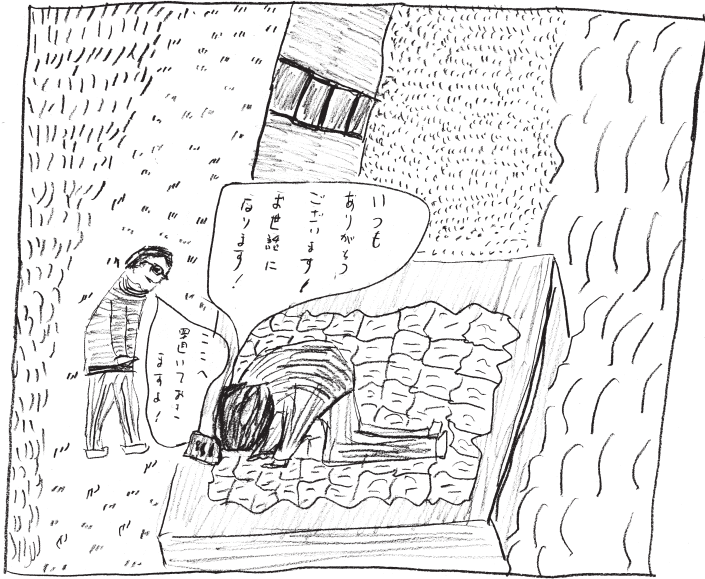
翌日、二条大橋の下で寝ているおっちゃんの枕元にパンを置く時に、「おっちゃん、ここへ置いときますよ」と声をかけた。すると、全く思いがけなかったことが起こった。あたかも私を待っていたかのように起き上がったおっちゃんは正座をして深く頭を下げ、こう言ったのである。

いつもありがとうございます。お世話になります。

「いつもありがとうございます。お世話になります」。おっちゃんのこの言葉が私を深い悩みから解放した。それは私を救い出す力を持った言葉であった。

*

「なあ、和夫。高尾さんのおばちゃんもおっちゃんも心配したはるんや。何とかしてあげられへんか？」と母から相談を受けたのは、12月も中旬に入った頃だった。母によると次のような事情だった。



私を救った言葉

福ちゃんは高尾さんの一人娘や。同じように俊雄さんは西村の一人息子や。そして、石川県の俊雄さんのお母さんが向こうに家建てやはった。息子夫妻に住んでもらおうと思ってな。俊雄さんにしてみれば、お母さんの気持ちかなえてあげたいわな。けれども高尾さんのことを考えたら、石川県には帰られへん。それで福ちゃんが俊雄さんの気持ちを察して、高尾の両親には内緒でこっそり石川県に行ったんや。何も知らなかった高尾さんはびっくりや。けどな、高尾さんのおっちゃんもおばちゃんも福ちゃんに帰ってもらおうとは思ったらへん。「二人はどうしてるかな？二人はどんな家に住んで、どんな生活してるのかな？」って、そんなことばかり気にしてる。何とかならへんかな、和夫？

高尾の両親に一言の断りもなく石川県へ転居した西村夫妻の行動は、両親として認めるわけにはいかない。だからたとえ気になって仕方なくても、今は自分たちから安否を問うこともできない。そこで相談を受けた母親の思いついたのが大学生の息子である。気心の知れた大学生なら、もめごとについては何も知らないことにして、それ

となく様子を見てくることが出来るのではないかと、考えたらしい。

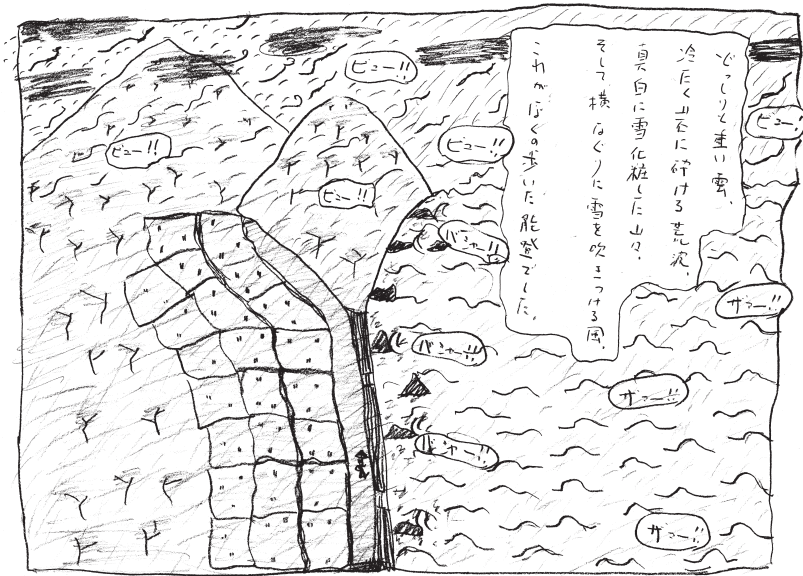
母の依頼を受けて思い出したのが、大学の掲示板に出ていたスキー講習会の案内である。「スキーに行った帰りに能登に寄ってみた」と言えば、それなりに恰好はつく。早速尋ねてみると、スキー講習会はまだ募集中だった。それで長野県野沢温泉において3泊4日で実施される講習会に申し込み、同時に西村夫妻に手紙を書いた。次のような文面である。

前から行きたかった能登半島を歩いて旅をすることになりました。スキーをした後に行きますので、スキーの道具を旅の間預かってもらえないでしょうか。

西村夫妻からは快諾の返事をもっただけでなく、「ぜひ、石川県の家に泊って行くように！」と手紙にあった。それで初めに寄る日には泊らせていただくことにした。高尾さん御夫妻からも「くれぐれもよろしく！」とお願いされて、2月中旬に現地集合現地解散のスキー講習会に出かけて行った。スキーを十分に楽しんで、野沢から石川県の田鶴浜（現在は七尾市）に向かった。何回も乗り換えをして、ようやく駅に着いた時には夕方になっていた。そこには福ちゃんが待っていてくれた。十分ほど歩くとお宅に着いた。広くてゆったりとした家だった。あげていただくのご馳走が用意されている。「富山湾で獲れた魚やから、大阪では食べられへん。しっかり食べて行ってや！」その夜はすっかりご馳走になって、ゆっくりと同志社大学のことなどを話した。本当は高尾さんのことを話したいのに、お互いにそのことにはひと言も触れることができなかった。

翌日スキーの板と靴を預かってもらって、3日間で能登半島を1周する旅に出た。コースは田鶴浜から半島の東側を海岸沿いに行き、突端に着くとそこから西側を輪島まで歩くというものである。約百キロメートルの距離を3日間で歩く予定である。歩きながら、家族の問題をひたすら考えていた。

家族って、一体何なんだろう。いつもは何の問題もないかのように振舞っている。しかし、何か事が起こる。そうすると、望んでもいないのに引き裂かれてしまう。西村さん夫妻は高尾さんのことを気にしていた。同じように高尾さん夫妻も西村さんのことが気になって仕方がない。こんなにお互いに心配し合っているのに、今は言葉を交わすこともできない。



ぼくの歩いた能登 (1972年 2月)

それはまるで日本海側に位置する能登半島の冬の重い気候のようだった。そんな風に考えながら歩いていた時に、ふと「雲の切れ目から太陽の温かさがさしてきた」。太陽の温かさは高尾さんと西村さんの心の温かさを思わせるものだった。だから、やがて太陽の温かさが春をもたらすように、彼らの温かい思いも時が来れば和解をもたらすに違いないと考えることができた⁷⁾。

3日目には輪島に到着して、そこで一泊した。輪島からはバスで田鶴浜に寄り、スキーの道具を受け取ると、大阪へ帰った。高尾さん御夫妻も母も西村夫妻に関する報告に耳を傾けて聞いていた。結婚や家族の問題に関心を持たされた私は次の夏から毎年のように、バプテスト連盟が天城山荘を会場にして開いていた結婚セミナーに参加するようになる。

7) 参照, 「能登のみやげに」(『一人の人間に』16-18頁)